真理と俺。

KOF

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真理と俺。

【Ｎコード】
Ｎ０９８１Ｚ

【作者名】
ＫＯＦ

【あらすじ】
自称普通の高校二年生、本多識織。彼が現在在住している東京都、と日本各地では自殺が多発していた。そんな中、識織少年は、向こう隣りのアパートに住む美人ねーちゃんの自殺を目撃してしまい――。超能力や魔術といったものが、ひそかに跋扈する世界に、一人の少年が巻き込まれる小説。※ナイフ戦闘に憧れての、異能バトル系モダンファンタジーです。

プロローグ

「ねえ、神様って、いるの？」

少しだけ昔、一人の少女が父親に問うた。
それは、どれだけの人間が疑問に思ったことか。その少女もまた、その多くの人間の一人だった。
しかし、父親は、何も躊躇わずに答えたのだった。

「いるさ。お父さんは、信じているから」

信じるところに、神はあらわれるんだよ。
少女の頭を撫でながら、父親は微笑んだ。
少女は、蒼白なその顔を、父親に向けて、彼と同じように微笑みながら、また、問うた。

「じゃあ、わたしのところにも、信じれば、神様はやってくるかなぁ？」

やってきて、お願い事、叶えて欲しいなぁ、と。笑いながら、顔を伏せた。
それは、不遜すぎる願いなのかもしれない。叶えて欲しいと思うことさえ、不遜なのかもしれない。それ以前に、叶う可能性など、零なのかもしれない。
それでも、願わずには、いれなかった。

「お父さん。神様は、わたしのこと、嫌いなのかな」

「……、」

白いベッドの上で、静かに涙を零しながら、無力な父に、そう語った。白い髪も、その涙で濡らしながら、触れれば折れてしまいそうな喉をしゃくりあげながら。

「お父さん、お父さん。わたしは、どうして、」

「神様がお前を嫌いになっても」

私は、お前のことを嫌いになったりしない。
私が、神になってやる。
父も、同じく涙を黒い瞳から零しながら、彼女の手を握った。
この二人には眩し過ぎるほどの日の光が差し込む白い部屋で、二人はお互い泣きあった。どちらが、どちらにというわけでもなく、どちらもが、どちらにも、泣いた。

「天の坐」

その、眩し過ぎるほどの部屋に、黒い点がぽつり。
そこからなのかもしれなかった。
無力な男が、狂い始めたのは。

プロローグ（後書き）

この作品は、作者の偏見によって満ち満ちています。

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

第一話：自殺予兆

二十一世紀もようやく世紀末を迎え、二十二世紀への期待が膨らむ中。様々な技術が発展し、様々なことが可能になった時代。
それでも、人が住む場所が一新されるわけでもなく、二十世紀から存在するアパートメント住宅。多機能化が図られたとはいっても、所詮はアパート。高級マンションなどと比べるとセキュリティ面でも圧倒的に負け、外面でも完璧に負けた存在だが、安価な家賃は学生が住むにはちょうどいいのだった。

その、都内某所のアパートの一室。

「自殺者が全国で急増、ねえ」

黒髪黒目の平凡な容姿をした少年、本多識織（ほんだしきおり）。登校直前なのか、リビング兼寝室で食パンをかじりながら、テレビ画面に映る、今話題のニュースを眺めていた。

「俺なら出来ないがね。そんな恐ろしいこと」

そう言うと。バターナイフでバターを掬い取りパンに塗りつけ一口。塗り過ぎたのか、濃厚なバターの味が口いっぱいに広がる。隅に置いてあったオレンジジュースで口直しをすると、もう一度テレビに視線を移した。

そこには、自殺者の遺書が映し出されていた。それも、生々しい錆色の染みがある、それらしい封筒に入った。
その文面は短く、端的な言葉しか述べられておらず、一般人が見ればサイコパスな文書にしか見えない。むしろ、書いた本人以外は何を言わんとしていたのか分からない。
ただ一文、こう書かれているだけなのだから。

『奴が来る』

震えた文字。飛び散った錆色の血液の痕。死亡方法は恐らく、手首切断（ストカット）。文書に飛び散った染みの模様は乱雑で、『刃物（リ）』ではないことは明らかだった。文書を書いた直後に筆記用具で掻き切ったのだろうか？

「……自殺か。味気ない、死に方だな」

そう言うとさっさと残りの食パンを口に放り込み、オレンジジュースで流し込むと、横に置いてあったカバンを持って玄関へと駆けて行った。

「いってきます」

と、誰に言うでもなく、アパートの中へと語りかけた。もちろん、誰からの返事もあるわけも無く、ただただ声が空しく響いただけだった。

靴を履き、玄関を開けると、そこには黒髪ポーニーテールの可愛い幼馴染の姿が――あるわけもなく、新学年早々の冷たい外気が体を引き締めた。

眼下には広大な光景が――広がっているわけも無く、アパートの三階、見渡せるのは、向かいの棟の美人ねーちゃんの下着ぐらいである。

いつも通りの光景。いつも通り際どい下着が風に揺れている中、一つだけ、異常な空間があった。

向かいの美人ねーちゃんが、ベランダの取っ手の部分に足をかけていた。ただ、尋常ではない様子で、何かに追われているような。

そして、目が合った。口が開く。か細い声で聞こえなかったが、口の動きで何を言わんとしているのかだけは分かった。

『た、たすけっ！？』

分かったが、言い終わる前に彼女は何もない虚空へと体を投げだした。

識織が知るところの彼女は、夜に出勤するどこにでもありふれたただの風俗嬢だったはずだ。もちろん、基礎体力も『一般』の域を出ない彼女は、絶対に助走なしで、否、もしあったとしても、識織が住む第一棟と彼女が住む第二棟の間は飛べない。

そして、超能力者でも魔術師でもない彼女を待ち受けるのは、

――――重力と言う名の、当たり前の力である。

次の瞬間、彼女は一瞬の浮遊感を味わった後、落下が始まり、獣のような声を上げてアスファルトで出来ている駐車場へと落ちて行った。

そして、不意に、人外染みた声が止んだ。近くにいれば、おそらくは聞こえたであろう果実を潰すような音は、遠く離れた識織の耳には届かなかった。

ただ、ゆっくりと向かいの駐車場を見下ろすと、そこには、真っ赤で粘着質の液体が、美人ねーちゃんを中心に不気味な魔法陣のような模様を形作っていた。

識織はその光景を何も言わずに見つめ、彼女が飛び降りてきた部屋の方に視線を向ける。

そこで、なにか紅い瞳を持った何かの存在を感じた。それは、識織に見られていると分かるや否や、一瞬でその気配を霧散させ、気配の海である街の方へと消えて行った。

何が起こっているか、あまり分かっていない識織だったが、ここは社会人になるための試練だと思い、通学鞄の中からスマートフォンを取り出し、警察を呼んだ。

「もしもし？　警察ですか？　たった今、飛び降り自殺をした女の人がいるんですけど」

第二話：異能

東京都某所。明蘭学園高等部。全国でも有数の名門私立学校で、学力もさることながら、運動も全国トップレベル。さながら文武両道を体現している、超の上に超を超倍したぐらいの超エリートが通う学校、のはずだ。

そこで疑問が湧き立つのだが、そこに超平凡である本多少年はこの学校に通っていい存在なのか？

――いいのである。

「おい、本多。本多きゅーん、聞こえてますかー？」

そんな超エリート学校の普通の教室で、自称普通男子、本多識織は自分の机に自前の枕を装備させて昼寝を敢行中。クラスメイトの善意ある挨拶を完璧に無視。

いびきを立てずに礼儀よくご就寝中であるのに対し、クラスメイトAは構わず話しかける。

「今日、新学年新学期早々遅れてやってくるとはどういう御了見でございませうか？」

そうなのだ。あの後、警察から事情聴取やらなんやらを無駄に長い時間かけて聞かれたわけだ。それもそうだろう。通報した最初の

言葉が、『飛び降り自殺』なのだから。

「……おーい。ぼこるぞハゲ。さっさと起きねえと、全部剃っちまうぞ」

「うっせえな！！　こっちゃぁ朝から事情聴取やらをされてとてつもなく不機嫌なんです！　あの税金泥棒どもが！　最近の連続自殺事件で目立ってるからって調子こいてんじゃねえぞ！！」

むぎゃー！　と叫びながら天井に向かって怒りをぶつける。クラスメイト全員の視線が集まるが、それを気にせず自前の低反発昼寝用枕にぎちぎちと噛みつく。

周りのクラスメイト達はそれの発生源が識織だと知ると、「またお前か」と口々に言って各々語らいに耽りだす。

「なに？　お前、また面倒事にエンカウントしたのか？」

クラスメイトＡ（男子）は、未だに荒れている識織を無視して話題だけを抽出する。まるでスポイトの如く、それ以外のものはゴミとでも言わんばかりに、識織の心を無視した。所謂、意趣返しである。

「ん、ああ……向かいの美人ねーちゃんが飛び降り自殺したのを目撃しちまった」

「へえん。大変なんだな、お前も」

「俺は、このことを聞いてそれだけで終わらせるお前は凄いと思うよ」

話が膨らまねーな、ともう一度低反発枕に顔を埋める識織。
それをクラスメイトAは、「人の不幸で話し膨らませても、面白くねーべ？」と至極まっとうな返答をしてくださった。それはそれでメディアの在り方を全面否定しているような気もするが、まあ、そんなものなのだろう。

「そんで？　お前は大丈夫なのかよ、生の死体を見て」

「……ん、そうだな、」

人の死体を見て、人の死に直面して、動揺しなかったのかと。それを見て、お前は『大丈夫』なのかと。平静を保てているように見えるが、本当はそんなこと無いんじゃないのかと。

「死体ぐらい、なんてことはないさ」

今までよく見てきたからな、と。
低反発枕に顎を当てて、黒板の方をぼーっと見つめながら、何の気なしに、当たり前のように、平然とそう言った。
それに対してクラスメイトAも、「そうか」と答えるだけで。
これ以上、この話は膨らませないほうがいいと判断してのことだろうか。もちろん、識織の冗談という可能性も高いし、現実味のない話しだ。
だからこそ、ではないだろうか。

「まあ、お前が大丈夫って言うんなら、大丈夫なんだろう？」

「まあ、俺が大丈夫って言うんだから、大丈夫なんだよ」

そこで新学年最初のホームルームを告げるチャイムが学校全体に

響き渡り、がやがやと生徒たちが各々の席について行く。クラスメイトAも例外ではなく、「じゃあな」と告げると右端の一番先頭の机に向かった。ちなみに、識織の席は左側の窓際、運動場がよく見える一番後ろの机である。

と、ちょうど一年生からの担任、孰川（いずかわ）るるるが高性能な身体を見せびらかしながら教室に入ってきた。大和撫子然とした長い黒髪を歩くたびに揺らしながら、その艶めかし胸やら何やらをぼわんぼわんと。

それと同時に学級委員が、「起立」と堅苦しい掛け声を。識織も仕方がなく低反発枕から顔を引き剥がす。

「礼」

「おねがいしまーす」

「着席」

とまあ、普通だ。

「おはよう、みんな。二年生になってもこのクラスを持てるなんて、嬉しいわ」

とまあ、普通の挨拶をしている孰川を興味なさ気に頬杖を突きながら眺める。相変わらず、男子高校生を挑発しているとしか思えないプロポーションをしている。男子からは欲望に塗れた視線が、女子からは憧れと嫉妬の目線が。

そんな普通以上異常未満の担任は、普通の挨拶をしながら、とあることに触れてきた。

「とまあ、ここまでは前置きだったんだけど、本多くーん？　キミキミ、いつになったらその面倒事エンカウント率下がるのかなー？」

「せんせー、それは禁句だと思いまーす」

あはははは、と教室から笑い声が上がる。識織は、やれやれと言った様子で運動場に視線を移した。

「本多くん、無視はいけないわよ無視は」

まだからかってくるつもりかこのオバハン、と心の中で悪態をつくと、識織はがらっと立ち上がって、「先生」と神妙な声で話しかけてみた。

静まり返る教室の中、るるるは、「どうぞ、本多くん」と相変わらず悪戯っぽく笑うだけだった。

「俺のエンカウント率なんかより、先生の露出度を減らした方がいいと思います。どこぞの写真部やらが盗撮しているとも限りませんので」

「本多アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！」

「あら、そうなの？　写真部副部長、浦島くん？」

「はっ！？」

ここまで簡単に釣れてくれるとは思わなかったが、どちらにせよ話題は自分から逸れたようなので、識織は悪魔のような笑みを浮かべながら低反発枕が待つ机へと顔面をダイブさせた。

なにごとも、頭を使えば大体の危機は回避できるようだ。また一つ、教訓を教えてもらったことに感謝しながら、尊き犠牲になった浦島くんに向けて、合掌。

◆◆◆

放課後。健全な高校生の諸氏であれば、八割方は部活動に精を出しているところだろう。しかし、識織は部活もせずに、とある一室に呼び出されていた。

その一室とは、――漫画や小説染みた、学校の生徒の中で最高権力を保有する、生徒会室。室内はオレンジ色の夕日が差し込んで、中央にある会議机を幻想的に照らしていた。

そこで、生徒会長である女性と対談中。

「識織くんは、自殺ってどういうことだと思う？」

窓から差し込む夕日に焦げ茶色の肩まで伸ばした髪を煌めかせながら、優雅にそんなことを聞いてくる。

「源先輩。その前になんで俺を呼びだしたのか聞いていいですか？」

識織のそんな問いに対して、源先輩――源終夢（みなもとのいむ）は、くだらなさそうにこう答えた。

「先生方から、あなたが最近流行りの自殺の目撃者になったからよ。じゃなかったら、平凡なあなたとなんか話しさえしないわよ」

少しだけ心に傷がつく識織。相手が女性なうえに美人なわけだから、ダメージは野郎に言われるより次元が違うレベルで痛いのだ。

そんな痛みを識織は覚えながら、彼女の問いについて考えようとしたが、アホらしくなってやめた。

「自殺ってのは、自分で自分を殺すから自殺って言うんじゃないですか？　それ以上でも、それ以下でもないんじゃ？」

「もし」

彼女は、識織の答えに対し、まったく物怖じした様子も無く、こう答える。

「もし、死んだその子たちが、誰かに脅されたり、苛められたり、蔑まれたり、差別されたり、追い詰められたりしていても、かしら？」

自殺とは、自分で自分を殺すことだ。これは変わらない。そこにどんな心境があったとしても、自殺とはそういうことだ。そこに誰か他人の手が加わった状態のことを他殺という。

しかし、終夢が言ったのは、どうなのだろうか？

「それは――、」

「社会的には何の制裁も加えられないけど、そうしたことを行った人間というのは、自殺を促したということと同様よね？　それはつまり、他殺、ということにはならないかしら。そうね、間接的他殺、

とでも呼んでおこうかしら」

間接的他殺。直接的他殺とは打って変わって、あまり騒がれない。それは、自殺という大きな隠れ蓑に隠れているからだろう。誰かが自殺者を脅していようが、苛められていようが、蔑まれていようが、差別されていようが、追い詰められていようが、最終的に死ぬのは、自分である。

「つまり、実体の無い殺人というわけよ。そういう、間接的他殺というのは」

「けど、やっぱり、直接的他殺、――殺人の方が、恐ろしくないですか？」

瞬間。彼女の華奢で細い右腕が物理的にぶれるのを感じた。

刹那。両目に突きつけられた人差し指と中指に恐怖を覚えながらも、その右手首をなんとか掴みとった。

「へえ、よく、止めたわね」

「生憎ながら、『眼』がいいんでね」

そう言うと、終夢の手首をぱっと離した。すると、そそくさと後ろに下がっていった。驚くことに、その距離三メートルである。通常の人間が初速度ゼロから一気にあそこまで加速するのは不可能だ。

「それ、何かの『異能』？」

「さあて、どうなんでしょうね。……はは、っていうか、センパイ、『異能』ってなんですかー？」

識織がそう言うと、終夢は面白くなさそうに、「ふーん」と息をつくと、意地の悪い笑みを浮かべるのもやめてしまった。
識織は、彼女のどこに琴線が隠れているのか恐れて、この話を膨らませないようにしたかった。

「そうやって線引きしているのもいいんだけどね？　最近の連続自殺事件、あれ、どう考えても『異能』によるモノでしょう？　私、そういう陰湿なの嫌いなのよ」

「先輩。後輩イビリは陰湿じゃな」

ヒュバッ！　と彼女の体が消えたかと思うと、次は膝蹴りを放ってきた。まさか、ここまで本格的な攻撃を仕掛けてくるとは思っていなかった識織は、その圧倒的質量による膝蹴りを、為すすべなく額に喰らった。
正直なことを言うと、そのスカートの中にある黒い下着に目を奪われていたのだが。

面白いように後ろに吹っ飛んだ識織を、彼女は、「ふん」と鼻を鳴らすだけだった。

「痛いですよ、先輩」

視界がちかちかしているのを感じながら、無意味だと分かっている反論をせずに入れなかった識織。

「隠し事は『面白くない』わ、識織くん。知っているなら知っているで、ちゃんと語らえることだってあるのだし」

高校生にしては豊かな胸の前（青系のブレザーを押し上げている）で腕を組みながら、額を押さえる識織を見下してそう言う。
識織は若干揺れる視界にぐらつきながら、よろよろと立ち上がると終夢に視線を向けた。
その焦げ茶色の瞳は、こう語っていた。

『真実を吐け』

識織は少しだけ迷ってから、意を決したように彼女を見つめる。

「『真理の明眼』っていうんですよ。俺の両眼。言えるのは、それだけです」

先程潰されそうになった眼に手をやりながら、自重気味に笑う識織。
それが、彼の異能の名なのだろう。

「ふうん。『異眼』系統ね、珍しいじゃない。能力は？」

「知ってるでしょう？　そういうのは、あんまり教えると自分の命にかかわるんですよ。俺、これでも自分の命は大切だと思っている人間ですから」

異能。それは超能力とも呼ばれる代物である。
もちろん、大々的に公（おおやけ）になっているわけではないが、知っている者は知っている。知る人ぞ知るを、さらにミステリシリアス化したようなものだろう。
その多くは普通と変わらない生活は、送れない。
精神が、もたないのだ。
だからこそ、こういった一般人である超能力者同士がこうして普

通に顔を突き合わせるのは珍しい。

「へえん。だったら、私のも教えておいてあげるわ。名前だけ、ね」

『波動』。そう呟くと、ふらふらと立ちつくす識織を置いて、どこかに去ってしまった。後ろ姿で手を振って来た。カッコよかったのが癪だったので、振り返さなかった識織。

生徒会長、源終夢。

根城である生徒会室から彼女が去ると、部屋全体に張り詰めていた緊張のようなものがぶつりと切れた。

「――なんだよ。あの速さ、素面（しらふ）ですかい」

そう悪態をつくと、識織も彼女を見習うようにしてその場を去った。

そして、去り際にこんなことを思った。

人を殺したことがない奴なんて、いるのだろうか？

第二話：異能（後書き）

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

第三話：真理の明眼

バイト。一人暮らしである本多少年にとっては奨学金よりも大事な収入源である。

コンビニの店員だが。

そんな生命線であるバイトに五分遅刻してしまった。普段は真面目な識織は、こう言うことに結構うるさい。これでクビにされたらどうしよう、などと本気で悩んでいたのだが、店長が寛容な人間なようで、「大丈夫だよ」の一言でホっと胸を撫で下ろした。

それもこれも、あのバケモノ生徒会長の所為である。

俺の心労に要した精神力を返せ、と口の中で呟いていると、お客に不気味がられたようだ。

学校が終わるのは午後三時三十五分。バイト開始は四時半。そこから九時まで働く。

時給は九百円。お高め。

こんな優良物件（おつとめさき）。簡単に諦められるはずがない。

そんなこんなで、今日も本多少年は快適空間（コンビニ）で精をだしている。

◆◆◆

バイトが終わり、夜も更け切った初春。適当に先輩や店長に挨拶をして、彼はコンビニを後にした。首には彼女からもらった手編みマフラー――なんかが巻かれているわけも無く、そんな存在も無く、微塵も無く、黒いネックウォーマーが着けられている。

「今日は、金曜だったか。なら、明日は行けるかな？」

コンビニの入口の前で月が浮かぶ空を眺めながら、どことなく嬉しそうに笑う。

そんな彼が向かうのは、自宅、というわけではなく、コンビニ近くの大型量販店、チープマーケット。とにかく、安いことで有名なスーパーマーケットだ。

移動方法は、もっぱらバイクである。学校への通学方法もバイクである。というより、どこに行くのもバイクである。まあ、バイクという名の原付なのだが。

ヘルメットをかぶり、エンジンを付け、いざ出発。

初春の頬を撫でる風はまだまだ寒く、ネックアーマーを装備していなければ頬が真っ赤になっていたであろう。

「さみーな、やっぱり。今日は暖かいモン食いたいな～」

そう言いながら原チャリを飛ばす。それでも、まあ、法定速度は超えないが。

そうは言っても、ギリギリのところまでは出すので、かなりの速度となっていた。

このままどこかに、何かに追突すれば、自分もあっさりと死ねる

ほどには、十分な速度に達していたのだった。

死。そのキーワードは、ここまで近くに存在している。
日々、人間は、自分は死なないと思って生きている。いや、それは非日常であったとしても、簡単に自分が死ぬというイメージは湧かない。
だから、死なない。
死というイメージを出来ない生物は、死なない。死ねない。

しかし、だ。
死、というイメージをしてしまった生物は、自分の死を想像できてしまった生物は、容易くその身を散らす。

自殺、もそういうことなのだろう。
自分が、自分に殺されるというイメージを、自分でしてしまった瞬間から、もう、『死』へと突き進んでしまう。

そう。

こんな風に、目の前に飛び出してくる少女のように。

「ッ！？」

その少女もまた、向かいの棟の美人の女性のように、何かから逃げるように車道へと飛び出してきた。
識織は暗がりから突然飛び出してきた少女の金髪を見た瞬間にハンドルを思いっきり左へと切った。車体は大きく横に傾いで、そのままアスファルトの上を大きく滑っていく。

刻一刻とバイクがアスファルトの上を滑り、少女の元へと突き進

んでいく。

――――仕方がないな。

バイクが彼女にぶつかる瞬間、その薄皮一枚を隔てて、圧倒的硬度の何かにぶつかったかのように、クラッシュ音を上げてびたりと止まった。

「ぐゥ！？　くそ、大丈夫か！！」

身体の至るところを擦り切り打撲したのか、よろよろと立ち上がる。夕方を想起させるのだが、気の所為だと思い、左右へ揺れながら金髪の少女の元へ駆けよった。

「た、たす、けて！！」

そう言いながら識織の身体にしがみついてくる金髪の少女。今度は朝のことを想起させてくる。朝、あの美人ねーちゃんが飛び移ることに成功していたなら、きっとこうなっていたのだろう。

「お、落ち着いて。どうしたの、いきなり飛び出してきて」

「や、奴が、奴が来るの！？　食べ、られちゃうの！！」

何を言っているのか、さっぱりだ。いや、相手はこちらに伝える気が無いのだから分からなくて当然か。彼女はただ錯乱したように喚いているだけなのだから。

「食べられるって、何に？」

未だ暴れる彼女の体を大きく揺さぶり、自分の眼を見させる。そうは言っても、今の自分の『眼』は、見ていて楽しいものではないだろうが。
しかし彼女は『眼』のことなどどうでもいいらしく、その『眼』をしっかり見ていた。

「や、奴は、奴は！！」

ひたり、と。
彼女が飛び出してきた暗がりから、何かの音が聞こえた。しかし、それは物理的な音ではない。頭の中にだけしか響かないような、そんな音だ。
いや、音と表現するのも馬鹿らしいのかもしれない。間違っているというべきか。

住んでいる世界が違う。起源すら違う。根本からして違う。

「バケモノなの！！」

ひたり、と。
彼女が飛び出してきた暗がりから、何かが出てきた。しかし、それは物理的なモノではない。見える人にしか、見せる人にしか見えないような、そんなモノだ。
いや、モノと表現するのも馬鹿らしいのかもしれない。間違っているというべきか。

「化け、物？」

黒い体躯の四足獣、といっても良いのだろうか？
狼のようなその骨格は、しかし歴史上の生物としては、その巨大

さは異常である。
三メートルを超すその巨体でありながら、無駄と言っていい所がまったくないそのしなやかな肢体。
それが、暗がりから二人の前に飛び出してきた。
『ァオオオオオオオオオオオオオンッ！！』
そんな、実体すら『妖しい』狼は、二人にしか聞こえない遠吠えを、二人に向けて放った。

◆◆◆

「なんなんだよォオオオオオオオオオオオオオオ！」
識織は叫びながら逃げていた。とても非合理的だが、混乱を吹き飛ばすには最適だ。
もちろん、金髪の少女も一緒に逃げている。彼女の手首を握って走っている次第なのだが、如何せん、一般人であるため、一般人以上の速さは出せないでいた。
ここで、何から逃げているのか？　など、愚問に尽きる。
あの、黒い狼である。こちらは合理的に、声を上げることなく、

ただただ詰めてくる。
ただ、三メートルという巨体の所為か、狭い路地に入ると走りにくそうにしている。まあ、それでも最後には、壁を砕いてやってくるわけなのだが。

「くっそ！　なんだよアレ！　どんな『異能』なんだ！？」

超能力と呼ばれる『異能』がある。それを識織は知っているし、もう分かってはいるだろうが、彼も『ソッチ』の『異能』は持っている。
その中に、『創造（クリエイト）』を称する能力者もいたが、それは『静』だった。その能力者は、効率が悪いと言っていた。
わざわざ『動』の物を創って、そういう『対象物を殺せ』なんていう設定をプログラミングするより、自分で剣を創って殺した方が早いからだ、と。

しかし、それは強がりに違いないことは分かっていた。

ここまで状況に正確に対応してくるとなると、一個人の脳ミソではプログラムしきれない。

（知らない『異能』？　……なら、仕方がないか）

彼の、所有する、世間一般的に言うところの超能力。
それは、『真理の明眼』である。
簡単に言えば、いや、難しく言ったとしても――全てが分かる『眼』という説明以外は、出来ないだろう。

その瞳を『開眼』することによって、見たいと思った全ての事象・真理が、見えるし分かる。それがどんなに超越的物理現象であって

も、超常的オカルト現象であっても、万物である必要すらなく、それらの事象が分かり、干渉できる。

空気であっても、壁のように扱えたり、金髪の少女にしか見えないように設定されているモノであったとしても、見える。

彼の『眼』の前では、神すらも等しい存在となる。

『開眼』と同時に、両瞳が、紅く染まった。
血のように、夕焼け空のように、ただただ、紅く、染まる。
右眼により解析を、左眼により干渉を可能とする。

（……見たこと、ないな）

やはり、生物ではない。機械仕掛け、というわけでもない。
そして――――超能力ですらない。

まったく新しい、見たことのない、世界の真理の一つ。
解析するのにかなりの時間を要するほどの、複雑な情報を有した、概念。

そこにプログラムされている命令は、『対象者を追跡すること』だけだった。そこには攻撃性は無い。ただ、ストーカーのように、ストーキングすること。
そして、最深部に――――『解析を行った存在を、殺せ』

「ッ！？」

自分で自分の墓穴を掘った、というべきか。『真理の明眼』で見るまでも無く、黒い狼の殺気が膨張する。波形状に繰り出される殺

気を視覚化して、避けながら前へと突き進む。

（空中に逃げるのは愚策、か――殺るか）

金髪の少女の手首を握っている方とは逆の腕を、一定の速度で振ると、袖からかなり大きめのナイフが飛び出す。柄の部分は黒く、完全なオーダーメイドと思われる、飾りっ気のないナイフ。

それを見た少女の顔が恐怖でくしゃりと歪むのを見て、「このまま走れ！」と大声で叫んだ。それを聞いたのか聞いていないのか、頷いたのか頷かなかったのか分からないように震えたまま、路地を走り抜けて行った。

ほっとする間もなく、振り向きざまに右手に握ったナイフでコマのように回転して斬りつける。

牙と直接ぶつかり、腕に直接衝撃が駆け抜ける前に、身体を横に滑らせ、ナイフの刃で受け流す。交差するようになったそのがら空きの横腹に、銀色の光を鈍く輝かせるナイフを逆手に持ち替え、掻き切らんと振り抜こうとする。

が、黒狼がその攻撃に対し高速で反応し、身体全体を回転させることでナイフの一閃を避けた。それと同時に、回転力を活かした前肢の一撃が、横に薙がれた。

殺意が込められた爪の鋭い一撃を、獣のように身を沈めて避けきる。瞬間、識織の両足の筋肉に、力が籠った。

身体を沈めたまま、ナイフを持った腕だけを夜空に向ける様は、まさに獣。

静から、動までの、ほんの一瞬。

「――――死ね」

彼の前では、不死にすら、等しく平等に死が与えられる。
生きていない存在にも、存在していない存在にも、平等に死をもたらす。
さらに身体を沈みこませ、冷たいアスファルトに吐息がぶつかるのを感じた次の瞬間、識織の身体が霞む。
走り抜ける銀閃。
黒狼は、二度と少年の姿を認識することは無く、全身に幾筋もの線が奔り、白いモヤのようなモノを噴き出し、陽炎のように消え去った。

識織はというと、額に若干汗を滲ませて、黒狼がいた場所の真後ろにいた。
手に持ったナイフを学生服の袖に仕込み直しながら、今回のことについて考える。
今回のこと、というのはもちろん、黒い狼に襲われたこともあるが――自殺者が全国で増加していることも含まれている。

「『異能』が関わってんのかよ……。面白くもない」

そこで、身体の力が抜け落ちるのを感じた。戦闘行為自体は、全然消耗していないが、原チャリで身体全体を殴打したのが、今になって効いてきた。

「あ〜あ。体、なまってんな〜」

そう言いながら、はた、と、ある重大なことに気がついた。

「原チャリ……こけた……俺、痛い……原チャリは？」

どうなったの？　と。
全身から血の気が引くのが分かる。そして、全力で今自分が走って来た道を駆け抜ける。汗が、どんどん冷めていくのが分かった。
そして――――、
「お、俺の、俺の血と汗と涙と魂の残骸の血晶がァァァッ！！」
もちのろんで、大破はしていなかった。が、ボディの左半分のそこかしこが、へこみ、傷ついていた。
まるで、自分の身体が傷ついたかのように悶え苦しみながら、怨嗟の声を上げる。
「――は、はは、俺の、俺の愛車……ブチ、殺すッ！！」
ここで、『これ以上の犠牲者は出さない！　覚悟しろ黒幕！』と言わないのは流石というべきか、言わないべきか。
頭の中で修繕費を考え、計算しながら、ため息をついた。原チャリに跨り、「カタキ、とってやるからな」なんてことを言って労わりながら、チープマーケットへと愛車を進めた。

◆◆◆

傷だらけの格好のまま、店内へ。一目散にレジの方へと歩いて行

くと、

「とにかく五千円分。量が多いお菓子を用意し」

「いつもの感じですね」

「はい」

結果、そんじょそこらのスーパーとは違う、文字通りチープなマーケット、チープマーケットでは、特大レジ袋五つ分駄菓子が詰め込まれた。その中に、カップラーメンの袋が一つ分。

「ありがとうございましたー」

一人暮らしの高校生にはイタイ出費だが、何故か識織はうきうきしていた。

もはや、先ほど上げた怨嗟の声など忘れてしまったかのように、スキップでもとりながら自動ドアをくぐる。

そして、原チャリを労うのも忘れて、早々と帰路についた。

第三話：真理の明眼（後書き）

ご感想ご批判ご指摘など、お待ちしております。

第四話：ひなどり園

今は、既に朽ち果てて誰も寄り付かなくなってしまった廃病院。外壁は黒い黴(かび)が覆い、窓硝子は割れてしまい、もうすぐ取り壊しが決まっている廃病院。

残骸。

数年前までは多くの患者が入院し、大病院ならではの忙しさに溢れた病院で、しかしながらそこには鬱屈とした雰囲気はなく、爽やかな病院、というのがコンセプトの病院だった。

だが。一度の医療ミス。死亡者。

一人の看護婦が、一人の患者のカルテを取り間違え、似たような症状にある患者に、別の治療を施したことによる、拒絶反応およびショック死。

よくある、廃病院になるパターンのやつだ。

そこの、よくある廃病院の一室。

ほかの部屋とは明らかに違う、調度され、黴も落とされた場所がある。

そこに、目に包帯をした白髪の少女と、黒い髪の男性。

「……見つけた。『異眼』」

黒い折り紙を、くしゃっと握りしめ、力を込めた。

その音に反応した白髪の少女は、その方に顔を向け、震える声で呟いた。

「どうしたの、お父さん」

「……なんでもないさ」

かつて、神にその身の全てを懸けて祈りを捧げていた男がいた。
それは、結局誰のためかと問われれば。
男は娘のためだと言い、
他人は紛うこと無き自分のためだと、そう言うだろう。

そして今、男は――悪魔に祈っている。

◆◆◆

朝といえば、爽やか、というイメージがある人は、かなり充実した人生を送れている人なのだろう。逆に、眠い、だるい、という人が充実していないというわけではないが、一日に希望が持てている人、と言いたいわけなのだが。

「爽やかな朝だ！」

体に絆創膏やら包帯やらを装着している人間がそう言うと、不気味に思うのは決して悪いことではないだろう。

「さてはて、どうするかなー！」

昨日買ったお菓子を心底嬉しそうに眺めていた。
識織は、そのお菓子を自分で食べるつもりなどない。誰か、他人のために駆ったわけである。
これで、数日間は寂しいご飯になるだろうが、彼が目指す目標のためならば、安いものである。

そして、朝ご飯を用意、といっても、トーストを焼くだけだが。ジャムなども用意して、テレビの電源をつけると、どかりとテーブルの前に座りトーストを食べ始めた。

ニュースでは、昨日飛び降り自殺をしたとされる、向かいの美人ねーちゃんのことが報道されていた。

『都内に住む、赤影橙季さん、二十五歳が、先日投身自殺を――』

あれは、『自殺』なのか？　と識織は思う。
昨夜の黒い狼に襲われていた金髪の少女を思い出す。アレは、超能力の産物ではないが、間違いなく『異能』の産物であった。
だから、それは、生徒会長の言うところの、間接的他殺、というやつなのではないだろうか？　と、そんな感情が堂々巡りをする。

「ううん。分からなくなってきた」

『異能』＝超能力と捉えていた識織。しかし、それは改めなければならないようだった。

「……魔術、か？」

そう。超能力が創りだす事象は、力の塊といえばいいか。もちろ

ん、脳内での事象を発動させるための演算はしなければならないが、それはほとんど無意識下で行われる簡単なモノである。
しかし、あの黒い狼には、明確な理論が適用されていた。
超常的で超越的な理論。不可思議で未解明な、明確な理論。そう、『術』のようなモノが組まれていた。
１＋１のような単純なものから、方程式など複雑なモノまで。
だからこそ、発動させる本人の脳容量は関係なく、複雑な命令を出せていたのか。

それらが分かりそうで分からない状況で、

「やーめた。どうせ見れば分かるんだし、次はもっとちゃんと見ればいいわけだし」

そう言って、雑念を振り払うかの如く、ジャムを塗りつけ、トーストを齧った。

『――都内を中心とする自殺者の人数は、昨年度の二倍に達しており、これは不況によるものとする説や』

ニュースで原稿を読み上げるだけのキャスターをぼんやりと眺めながら、もぐもぐとトーストを咀嚼する。
いつも通り、オレンジジュースで飲みこむと、

「――――魔術、か」

そう呟いて、トーストを再度齧った。

◆◆◆

都内某所、孤児院。金が無くて、幸せが無くて、金が無くなって、幸せが無くなって生まれるモノがあるといえば、それは、溜め息と不幸と、孤児である。

ひなどり園。都内各所に点在する孤児院の中で、比較的小さな孤児院。

そこに、

「あ！　しきおりにいちゃんだぁ！」

「ほんとだ！　おにいちゃーん！」

ほんの少しばかりの『異能』を所有している、本多識織が現れた。厚めの黒いパーカーとジーンズ。両手にははち切れんばかりの菓子が入ったレジ袋が握られている。

「うおおー！　なんだこれぇ！？」

子供の人数が十人程度のひなどり園であれば、二週間はもつだろう。

識織は、「ちゃんとみんなで分けるんだぞー？」と笑いながらそれを渡すと、騒ぎながら、ひなどり園低年齢層組、二、三人が持って行った。

それを微笑みながら見つめていると、識織と歳が近そうな、深い

藍色の髪を持った少女が近づいてきた。

「識織さん、いつもいつも、すみません」

「いいんだよ。藍華さん。こっちこそ、いっつもいっつもやってきては、楽しませて遊ばせてもらってるから」

と、最大級の笑みを向ける。藍華と呼ばれた少女も、それを見て笑いを零した。

「それにしても、やっぱりこれだけの子供の面倒を見るのは大変だろう？」

「ふふ。お父さんもお母さんも働いてますから。私が頑張れば、子供たちが笑ってくれる。それだけで、私、頑張れるんですよ」

彼女は、十六歳。しかし、高校には通っていない。父親と母親が始めた孤児院をやりくりするために、ここで働いている、というべきか。

だけど、そんなのは全然苦になっていないらしく、毎回同じような質問を投げかけている識織に対して、毎回同じ回答をするのだ。それも、笑いながら。

「じゃあ、識織さんは、なんでここに？」

しかし、彼女から識織に質問をすることは無かった。

識織は、なんとなくまだまだ蒼い空を仰ぎ見る。自分は、孤児ではない。今は、『家庭の事情』で家族とは離縁状態だが。そこに、彼らと同じ苦しみを味わったから共感できる、という理由は無い。

「ん〜、ここの子供って、泣かないよね」
「へ？　え、あ、はい。転んだりしたら泣きますけど、癇癪を起したりはほとんどしないですね」
「本当は、」
ほとんど間を置かずに、
「泣きたいはずなんだよな」
そう、言った。
様々な理由があり、彼らおよび彼女らは親に捨てられた。彼らからしてみれば、自分は何も悪くないというのに。
本当は、本当は泣きたいはずなのに、当たり散らかしたいはずなのに、今日も彼らは、笑う。
「だから、泣かせてあげたい、のかな？　嬉し過ぎて、泣けるぐらい」
俺がここに来ることで、少しでもそれに近づくなら、素晴らしくない？　と、少し悪戯っぽい笑みを浮かべる。
彼の習慣は、ここ、ひなどり園に遊びに来ること。決して、藍華を口説きに来ているわけではないのだ。
識織は周囲を見回し、「そりゃそうか」と呟くと、藍華に、
「あの娘は、どこに？」
「えっと……いつも通り、あの場所に」

そう言って、藍華が指をさしたのは本館。地域住民とのふれあいの場所。

「仕方がないのは分かっているんですけど」

「……、」

仕方がない。そうなのだろう。

じゃ、ちょっと行ってきますよ、と識織は後ろ手に振りながら、本館・ふれあいの場へと足を向けた。

その後ろ姿を眺めながら、溜め息。

「……はー。いいなあ、イブちゃん、羨ましいよ」

切なげに笑みを浮かべると、とぼとぼと子供たちの方へと歩いて行った。

◆◆◆

「お兄さんがやってきたよー」

がらっ！　と勢いよくガラス張りの戸を開くと、ふれあいの場に入る。

周囲にはファンシーな人形や、お城の張りぼて、手作り感溢れる

着ぐるみなど、学芸会に使うようなものが多く置かれている。
　そのファンシーな人形の山の中に、一つだけ生気を帯びた何かがいる。それは、白い、純白の髪を持ち、色素の薄い瞳を持った、オンナノコ。

　まるで人形のように無機質でありながら、そのなまめかしさは人間のソレで、日の光を浴びたことが無いような白過ぎる指で、分厚い本のページをめくっていた。

「イブちゃん。こんにちは」

「……」

　十二歳ほどの少女イブ――園木斎歩（いぶ）。当て字としてイブと読むのだ。
　識織は、その少女の前に中腰になると、へらっと笑って、

「お菓子買ってきたんだけど、一緒に食べない？」

「……いらん」

　識織に視線を向けず、一言で切り捨てた斎歩。
　そんな少女の姿に苦笑いを漏らしながらも、頭をぽりっと掻き、再度チャレンジ。

「めげないぞ俺は。イブちゃんが話してくれるまで、諦めない」

「さっさと諦めろロリコン」

　ペラっと、軽い調子で分厚い本のページをめくると、くあっと欠

伸をした。
若干涙が零れた紅い瞳で無音を見ると、面倒臭そうに口を開いた。
「面倒臭いぞ、キサマ。ボクにかまうなと言っているだろう」
十二歳程度の口ぶりとは思えない、大人びたというより、達観したように語るのだ。
紅い瞳を、伽藍の洞のように見開いて、ただ、じっと識織のことを見つめていた。なにも感じていないかのように。
だが、識織。識織は動じない。
「やだな、イブちゃん。人と話すのをやめちゃうなんて、それすなわち文化を捨てるってことだよ。人間最大の文化は、対話さ」
「知るか」
「ほら、そうやって切り捨ててばっかりいるから、君の中にはなにも溜まらないんじゃないかい？　空っぽってうのは、悲しくないか？」
「別に」
「――信じるのが、怖いのか？　わかるよ、その気持ちは」
「黙れ」
「だけどね、イブちゃん。そのやり方は、よくない。怖いからって、怖いからって逃げてばかりいるのは駄目なんだよ。たまには逃げるのもいいのかもしれないけど、ちゃんと向き合うことだって、」

「五月蠅い」

「――大切なんだよ。きちんと誰かと向き合う。それが人間にとって大事なことなんだ」

「消えろ」

「君がなにを『視て』しまったのかはわからないけど、それでも、君は戦わなくちゃならないと、俺は思う」

「死ね」

「過去に絶望したのか、未来に絶望したのか、俺にはわからないけど、さ。イブちゃん、君には現在(いま)があるじゃないか。現在と向き合っていこうぜ」

「嫌だ」

こんな問答、そんな返答が、およそ一時間続いた。

どちらも譲らず、識織は自分でも笑えるほどの綺麗事を言いまくり、斎歩はなにも感じないままその全ての綺麗事を拒絶した。

第四話：ひなどり園（後書き）

ご感想ご批判ご指摘など、お待ちしております。

第五話：ひなどり園（2）（前書き）

……まさか、この小説は、バトルという皮をかぶった、文学小説なのか？

と疑うほどに、考察が多い小説となっております。

第五話：ひなどり園（2）

「識織さん、どうでしたか？」

と、少しだけ心配そうに尋ねてくる藍華。「どうでしたか？」と聞かれれば、識織としては、「そうでした」としか答えようがないのだが、無理矢理答えを創る識織。

「そうですね、喋ってはくれるんですけど――子供らしくないと言えば、そうですね」

あのしゃべり方は、十二歳では絶対に獲得し得ないような喋り方。精神が未成熟な小学生には、演技でも不可能に思われる。最近の小学生は大人びているとは言っても、アレはそれ以上だった。

大人びているというより、達観している。

もう、『視てしまった』かのような、そんな雰囲気。視て、分かってしまったからこそ、諦めているような。

「まあ、子供が意地はってるって思っていれば、可愛いモンっすよ。逆に微笑ましいというか、なんというか」

「そうだと、いいんですけど……」

「そうだ、藍華さん。イブちゃんがひなどり園に来た時の様子、教えてくれませんか？　何か、分かるかもしれません」

過去と現在は、絶対に繋がっているはずだ。

急に興味を持ち始めたことだって、それは昔、小耳にはさんだりちらっと見たりしたことで、それが何らかのきっかけを受けて、意識の表面に浮きだしてきたのかもしれない。

あの徹底的なまでに無関心は、人間的に見て、過去に何かあったと思わざるを得ない。

藍華は、少しだけ躊躇った様子を見せて、そして口を開き、動かし始めた。「あのですね？」と。

「あんまり、子供たちの過去を掘り起こしたくないので、言いたくないんですけど……」

けど、と、

「あの子がまた、表情を見せてくれるなら」

「ありがとう、藍華さん」

定型的に頭を少し下げる識織。

下げた頭を上げながら識織は思った。この藍華の言葉で分かったことは、やはり、昔の斎歩は表情を解放していたということ。そして、やはり、過去なにかしらのことがあったということ。

……まあ、このひなどり園にいる子供たちには、それとない過去があるわけだが。斎歩の場合は、それが特に顕著なのだろう。

「イブちゃんは、比較的年齢が高い時に、このひなどり園に置いて

行かれたんです」

「最近？」

「ええ。そうですね、識織さんがここに通うようになる一年前ぐらいでしょうか。最初見たときは、いつもニコニコしていて、元気な子供だったんですよ。ここに、置いて行かれる直前まで」

それから、というものだ。

「親は、そんなイブちゃんを化物でも見るような目で見ていたんです」

「――アルビノの所為か」

あの白髪紅眼。なにも、ファンタジーな要素があるわけではなく、脱色でもなく、――生まれつき。

先天性白皮症。生まれついて細胞のメラニンが欠乏している病気のこと。そのため、紫外線には特に警戒する必要があり、視覚障害や皮膚癌などを起こしやすくなる。アフリカの南東部では、その体には不思議な力が宿るとされ、臓器や体の一部を狙った殺人が後を絶えない。

だから斎歩は、あの薄暗い部屋でただ一人、分厚い本を読んでいる。

「アフリカ南東部では『神の子』とかって呼ばれているらしいですから。イブちゃんのご両親は熱心なキリスト教徒で――逆に、怖かったんでしょうね。自分たちが信じるその存在そのものが、目の前に現れるっていうのが」

信じたものは、不明確であるからこそ、信じられる。実物を見て、後悔しないように。
それは、アイドル信仰と同じようなものか。代表例で言えば、アイドルの排泄物は卵で云々。盲目の盲信だ。

その後、藍華は少し口ごもって――言った。

「離れるのが嫌で、泣き叫ぶイブちゃんに向かって、父親の方が、こう言ったんです。とても、冷たい目で。――――『お前に未来なんてないんだ』って」

一瞬。識織の瞳が死んだように虚ろになると、そのまま悪態を吐いた。

「……クソ野郎」

「……それから、涙が止まって、声が止まって。……まるで、のっぺら坊みたいになって、立ちつくしていたと思ったら、一人であの部屋に行ったんです」

親にとって、子供とは何なのか。
神や、仏の教えよりも、軽いものなのか。いるかいないかも分からない、不明確な存在よりも軽いというのか。
子供は、所詮は授かったモノとしてしか見ることが出来ないのか。自分たちのチカラで産み育てた子供を、他の力で授かったと形容するのは、おかしくないだろうか。

――本来ならば、こうやって悩む必要などないはずなのに。

理由など、考える必要などないはずだった。理由なんてそんなも

のは、ないのだから。
親が子供を護りたいと思う気持ちは、理由なんて御大層なものはないはずなのだから。

識織とて、今は親と仲違いをして、一人、愛知から東京まで上京してきたわけだが、それでも両親は自分のことを心配しているだろう。……少々厳しい所があり過ぎるのだが。

「持っていたものを失う辛さは、測り知れません。多分、そのことで精神的外傷（トラウマ）を負ったんだと思います」

「……本当、識れたモンじゃないですね」

人とは、残酷だ。
残酷を、酷使し過ぎだ。
本当に、わからない生物だ。

第五話：ひなどり園（2）（後書き）

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

第六話：死ぬ瞬間

帰り道。もちろん、ひなどり園からの帰りである。
午後五時には帰らないと、今度は識織が藍華の面倒になってしまうので、彼は自主的に帰るようにしている。帰る際には大体いつも、『かえらないでー』とか『今日泊ってけばー』とかいう感動的なことを子供たちが言ってきてくれる。ちなみに、藍華の両親であり、ひなどり園の経営者である二人は、識織のことを知っている。

びすがすと、ヘンな音を上げるエンジンを気にしながら、原チャリを押して帰るのは面倒なのでアクセルを回し続ける。
随分とボロくなってしまった相棒。哀愁を漂わせているが、上に乗っかっている彼としては、なんとも情けなく感じてしまうその姿。
早く修理に出してやろう。
そう決心した。

それから考えるのは、やはり斎歩のことか。
あの伽藍の洞のような瞳に何を抱えているのか。あの全てが消え去った純白の髪は何を思っているのか。
そして、彼女の親の言葉は、彼女に何をもたらしたのか。何を奪っていったのか。何を殺してしまったのか。何を壊してしまったのか。何を終わらせてしまったのか。
識織は、原チャリのアクセルを若干強く握りしめながら、顔にぶつかる空気に顔をしかめ、自問自答する。

以前だ。以前、識織がまだ中学生だった頃、ある一人の少女を救

えなかった。彼は、その少女の心の闇に気付くのが遅すぎた。後悔なんてものじゃない。悔しさなんてものは生まれなかった。ただ、憎しみが生まれた。

だからこそ、と言ってはなんだろう。

識織は、その時の自分と今の自分を。そして、その時の少女とあの伽藍の洞の少女を重ねてしまっているだけなのかもしれない。ただ、似ているもので償おうとしているだけなのかもしれない。

この世界に代わりが効くモノなんて、無いのに。

今と過去は、代わりになるわけがないのに。

重ね合わせてしまっているのか。

そう思うと、少し滑稽な感じもする。だが、だからと言って、今更やめることなど出来ない。

伸ばした手は、助けられるまで伸ばす主義だ。

だから、彼は、彼こそが識る必要がある。あの伽藍の洞の少女が、どうしてああなってしまったのかを。

「考察は、あんまり得意じゃないんだけどなぁ。だけど、こんなところで『眼』に頼るのも、なんだし」

『真理の明眼』を使用すれば、こういう、概念系の問題はすぐに分かってしまう。まるで、全ての努力を嘲笑うかの如く、この『眼』を使用して、何かを知ろうとした瞬間、全ての真理が彼には分かってしまう。

だが、それでは駄目だ。それでは、あまりにも意味が無さ過ぎる。

オレンジ色に染まって行く空のように、ただ蒼から橙に変わってしまうだけだ。変わってしまうだけでは、意味が無さ過ぎる。

進行のプロセスをすっ飛ばして得た何かなど、得る必要などない。

それは誰も幸せにはしないし、不幸にもしない。ただの結果など、誰も必要とはしない。

だからこそ、識織はこの一年。一度も彼女に『真理の明眼』を使用したことは無い。

これは、あの少女の為にやっていることだ。あの少女がまた笑えるようになるには、泣けるようになるにはどうしたらいいのか。

それは、識織が異能を使ってわかったとしても、あの少女が分かっていなければまるで意味がない。

結果として、最終的に、結論的には――あの少女は、自分で自分を助けるしかない。

こちらは、手助けしかできないだろう。

ここで、自問自答。

自問：誰が誰を助けるのか。

自答：識るか。

◆◆◆

週末の日曜日。すでに百年は続いているとされる国民的アニメを夕焼けが差し込む部屋の中で眺めていると、ふと、ノスタルジックな気持ちになる。今ではあまり見ないような家族形態。その中で繰

り広げられる、ありふれた日常を少し誇張したストーリー。
国民的、というのはつまり、あるのが普通という存在だろう。ポテトチップスと同じようなものだ。
それが無いと、何か落ち着かない。それを見ないと、そういう気分にならない。
なにはともあれ、古き良き存在だ。

「ああ、暇だ」

しかし、高校二年生十七歳である本多識織少年にとっては、少し刺激が足りないものだったらしい。
テレビのリモコンはタッチパネル式。ある程度文明が進化すると、しなくてもいいものまで進化するのが難点だ。いくつかのチャンネルを飛ばし飛ばし見ながら、何かないかなぁ、とぼんやり眺めていた識織。
すると、あの連続自殺事件が超常現象を取り扱う番組で放送されていた。

『すると、今回の件はなにか不思議な力が働いていると？　超常現象研究所所長の有賀見先生』

コメディタッチ風に、白衣を着た壮年の男性に語りかける司会者。おそらく、今回の件で視聴率を伸ばそうと試みているらしい。どうせ、番組が終わった後には『ご遺族の方々に追悼の意を表して』とかなんとか言っておけばいいとでも思っているに違いない。
質問された壮年男性は、神妙な顔で答える。

『はい。この世界には不可思議な力で満ち満ちていると、私は考えています。そもそも、この世界の現象には全て原因が存在します。その原因にも原因が存在し、さらにその先にも……と続いていきま

す。それが、途中で途切れるわけですね？　そこが、物事の真理と言うもので――』

なんだか、結構深いことを言っているような気がしないでもないが、そこまで面倒なことをしなくとも、真理はそこら中に転がっている。

というより、このオカ研の部長のような壮年男性、話が逸れ過ぎである。

『――なのですが、この自殺の共通点。みなさんは知っているでしょうか？』

『錯乱したように、何かから逃避するように、最後は命を断つというところでしょうか？』

司会者の男が壮年男性に答える。

壮年男性は、「はい」と頷くと、座っていた机の下から一枚のボードを取り出した。

『ここは私にもわからないのですが、ここに、ある死の概念が存在するとします。それは具体的なものでも、あやふやなものでも構いません。それが死だと悟った時から、ようするに、自分の死期を悟った時から人間はいくつかの段階を踏むと言われています。これは、元シカゴ大学精神医学部助教授・医学博士のE・キューブラー・ロスという女性が、二百名を超える凛氏患者などとのインタビューから、死期を悟った人間が引き起こす反応とその後の過程を五つの段階に分けて説明した「死ぬ瞬間」という著から引用したものなのですが――』

それなら、識織も知っていた。嗜み程度ではあるが、そういう本

には何度か目を通したことがあった。

第一段階として『否認』。

自分が死ぬという事実を受け入れられず、否認することによって崩壊する自分を保とうとする。

第二段階として『怒り』

否認ではもはや維持できなくなると、憤怒や、羨望、恨みなど、負の感情が第一段階にとって代わる。

第三段階として『取引』

本能的に分かっている『良いことをすればそれ相応の報酬が得られる』ということを、死の数日前から行う。これは、一種の信仰と同じで、神との取引とされている。

第四段階として『抑鬱』

これには二つのパターンがあり。『反応抑鬱』と『準備抑鬱』と呼ばれる。

『反応抑鬱』は、大きなものを失くしたという喪失感。

『準備抑鬱』は、この世との決別を覚悟するための準備的悲嘆。

第五段階として『受容』

無の境地に達する。感情がほとんどなくなり、一人きりにされたいと望む。

これらの段階で、様々な感情――所謂、生への執着と猛烈な戦いをする。

『受容』に至れば、もう後戻りはできない。

自ら死へと向かっていく。

『その、死の概念が迫ってくるとします。あなたなら、どうしますか？』

『必死で、逃げますかね』

「戦う、かな」

テレビに向かってぼやく識織。

元からの知識も相まって、壮年男性の言いたいことが大体分かってきたらしい。

『その逃げている段階で、「死ぬ瞬間」に記されている五つの段階を上っているわけです。下っている、と言ってもいいでしょうか』

死の概念――あの、狼。それが、この言葉に相当する存在になるのだろう。壮年男性はそのことには気づいていないだろうが、ほとんど本質を突いていた。

もしかして、この人は、本当は凄い人なんじゃないか？　と、識織は思ってしまった。

『「受容」の段階に入れば、既に死を受け入れている状態ですから、自ら死へと向かうわけです。それが、自殺となって今現在、全国で急増していると私は推測します』

『ですが、その死の概念と言うのは、なんなのですか？』

それを聞いたら、何もかもが台無しになるのが分からないのだろうか？　この司会者は。

識織は、今からオカルト派と非オカルト派の醜い言い争いが始まる前に、テレビのチャンネルをさっさと変えてしまった。

移り変わるチャンネルを眺めながら、識織は考える。

迫りくる死に対して、自殺者たちは何を思ったのか。

……まあ、それは人それぞれなので、識織には分からないことだった。

オレンジ色の夕日が、少し紫色に変わった頃。
識織は面倒臭そうに立ち上がり、キッチンへと向かった。今日の夕飯は、カップラーメンになりそうだった。

第六話：死ぬ瞬間（後書き）

E・キューブラー・ロス著の「死ぬ瞬間」から引用。

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

第七話：高校生の日常および非日常

流石に。

流石にあのぼろっちぃ原チャリで登校するのは憚られたので、久々の自転車での登校となった。自分が原動力と考えれば、自転車だって原チャリである。

少しだけ下着に染みた汗を乾かすために、服をパタパタさせながら教室に入ると、何か待ち構えたように識織の席の前には、クラスメイトAがいた。

「おっす、クラスメイトA」

気さくに話しかけた識織。気さくだが、呼びかける言葉に悪意を感じるしかなかった。

「なんだよその名称は」

「名前で言うのが、腹立つ」

「なにその理不尽！」

「アキラくんのAだよ。それ以外のなんだっていうんだいアキラくぅん」

「アキラじゃねえ！　俺の名前は、」

「あ、先生きた。ほら、席つかないと反省文書かせるぞ」

「なんでお前に反省文を書かせられないといけないんだよ！　お前の態度に対して、俺が反省文を書かせてやりたい気分だ！」

「え、なに？　三文字以内で今の感想を述べよ？」

「なにそれ、どこにそんな要素があったんだよ！」

「黙れ。ほら、句読点も含めて、三文字以内だ。百点満点中百点じゃねえか。それに、今の感想を的確に述べている。俺って、もしかして文系なのか？」

「黙れ！」

「はいはい。知ってるか？　テスト用紙には感嘆符を使っちゃいけないんだぜ？　アキラくん」

「だから、俺の名前は！」

「アキラくん。いつまで本多くんの前の席にお邪魔になってるの。井上さんが困ってるじゃないの」

「先生までっ！？」

味方のいなくなったクラスメイトAは頭を抱えると、「うわーん！」と叫びながら自分の席へと戻って行った。物凄くいじり易いキャラだった。

そんな憐れなクラスメイトAに敬意を表して、合掌。

昼休みと言えばお喋り。
学校内における話題のタネと言えば、友人の行動、先生の行動、昨日のテレビ、恋愛情報等々、多岐に渡る。
その中でも一際注目を浴びるのが、生徒会役員の動向。および観察である。
生徒会役員、総勢五名で構成される、学校内最高権力たちの情報は学校で暇をする生徒たちにとって格好の餌となるのだ。目立つ人間から搾取される。これは、どんな大きな規模でも小さな規模でも、同じことだ。

「知ってるか、本多」

朝のショートホームルーム活動で踏んだり蹴ったりだったクラスメイトAが、また性懲りもなく識織の前の席に座っていた。識織はと言うと、面倒臭そうに低反発枕に突っ伏しながら、それでもクラスメイトAの話に耳を傾けていた。

「なにをだよアキラくん」

「だからアキラじゃねえって言ってんだろうが」

「冗長になるから、アキラくん。アキラくんでいいじゃねえか。カッコいいんだし」

「……わかった、アキラでいい」

「小説や漫画、およびエロゲでよく使われそうな名前だけどな」

「却下だァ！」

名前でいじる、小学生レベルの言い合いをしている高校生の姿がここにあった。
話を戻す為に、「ったく、俺の名前は」と繋ごうとしたクラスメイトAだったが、「アキラくんだろ？　知ってるって」という識織の相槌でまたも自己紹介が出来なかった。

「……話を戻すが、知ってるか、本多」

「なにをですかアキラくん」

本多識織という男は、しつこい男だった。

「……金曜日にな、あの生徒会長がとある男子生徒、それも生徒会役員じゃない奴を生徒会室に招き入れたらしい」

どくん、と胸が高鳴った。しかし、それは期待などの正の感情ではなく、嫌な気分になる方の、高鳴り。まるで、『犯人はお前だ』と言われたような、そんな感じ。
しかし、クラスメイトAはそのことの気が付いていないのか、「その男子生徒はあの鉄壁の生徒会長の恋人なんじゃねえかって噂されてんだよ」と自慢げに語っている。

（……は？）

識織は呆けた。識織は呆けた。識織は呆けた。
思わず、スリーアングルで呆けた。

（待て、待て待てまてまてまてマテマテマテ。俺が、いつ、生徒会長に、フラグ、をたて、た！）

「いやぁ、その男子生徒っていうのがさぁ、平凡な容姿らしいんだわ。ここで、まさかの、生徒会長面食い説が崩れ去ったわけだよ。今まで幾億の男共が、一説には先生の中にも告った奴がいるらしいんだけど、それら全てを跳ねのけてきた無敵の生徒会長殿がねえ。やっぱり性格なのか？　男ってのは性格が大事なのか？　同志よ、年齢＝彼女いない歴の同士よ、俺に教えてくれ」

……なんだかとてつもなく勘違いをしているようだが、識織にそんなことを聞いても分かるわけが――あった。

「……話題性が、大事だと思うよ」

「ようするに、派手になれっつーことか」

「……いや、今話題の的になることだよ、多分」

「ふうん。そうなのか」

間違ったことは言っていないはずだ。あの生徒会長の好みは、ズバリ『面白いこと』。人ではない。こと、なのがミソである。

「実は俺、会長みたいな女の子、好みなんだよ。ほら、年上のお姉さん、包容力でいろんなナニを包み込んでくれそうだし」

「……潰されるぞ、いろんなナニをな」

「ん？　なんか言ったか？」

「いや、お前の夢を壊さないためにも、言わないでおくよ。さあ、

アキラくん。エロゲの主人公の如く、生徒会長源終夢を攻略して来い」

「だからアキラじゃ！」

「識織くん、ちょっといいかしら」

ざわっ、と、クラスメイト達の視線が全て、全て識織に向けられた。クラスメイトがクラスメイトに向ける視線ではない。肉食獣が獲物に向ける視線。被害者が加害者に向けるような視線。

あの、完璧で謎多き生徒会長に、何故お前ごときが呼び出されるのだっ！　という視線だ。

妬み辛み好奇心その他諸々の感情が、クラスメイト達全員から向けられていた。

ここまで人の感情に曝されたのは、恐らく中学生の時以来か。まあ、あのときはたったの一人から、これ以上の感情をぶつけられたわけなのだが。

それにしても、人の感情というのは、単純というか複雑というか、識織少年にはそこすらも掴めなかった。掴みたくもない、と言った方が正しいのかもしれないが。

「識織くん、ちょっといいかしら」

ここで、識織は生徒会長源終夢を完璧なまでに無視していのに気がついた。完璧な生徒会長に対する意趣返しか。しかし、それにしては、識織には生徒会長に意趣返しをするようなことはされていなかった――されていたが、しようとは思っては無かった。なので、ここでは偶発的事故、ということになるだろう。

それにしても、生徒会長源終夢が言葉を発するたびに、識織に向けられる感情の威圧感が上がっている気がした。それは気のせいだと信じたい、いや、でも逃げるのはどうかと思う、本多識織少年だった。

「識織くん、ちょっと、いいかしら」

少しだけイライラしてきたのか、それとも最初の無視とは違い、今度の無視は故意的なものだと気付いたのか、発せられた言葉がぎくしゃくと強張っていた。

識織としては、これ以上を無視したら公衆の面前で生徒会長源終夢がどんな行動に出るのか興味があったが、額に青筋が寄っているのを見ると、生徒会室でなにをされるのか分かったモノではないので、とりあえず返事をすることにした。

「なんでしょうか、源先輩」

ただし、低反発枕に突っ伏したまま、だが。

「ちょっと、いいかしら、本多識織くん」

名前を後回しにしたところを見ると、そろそろ限界か。返事をしたのに、内容的には同じ質問が返って来たところを見ても、同じだった。

識織は低反発枕に精一杯の静かな溜め息を漏らした。そして、最近の高校生らしく少しだけファッションを気にした髪形をぼさぼさと乱してから、勢いよく立ち上がった。周りからどよめきが起るのが痛々しい。

「し、識織」

「名字で言うっていう、繋がりが深いのか浅いのかよく分からないキャラ設定が崩れてるぜ、アキラくん」

「だから、アキラじゃない……」

ツッコミがしょぼくなってきたところで、識織は生徒会長のところに向かって歩き出した。教室で固まっているクラスメイト達を掻き分けて、教室の出入り口に向かう。教室の外にも明蘭学園の生徒たち（何故か三年生もいる）がいつもでは考えられないくらいにいた。どうせ、生徒会長見たさの野次馬どもである。無視して構わなかった。

ようやく。ここまで教室の外に出るのが疲れたことは無かった。

ようやく識織は、額に青筋を浮かべて眼を細めて微笑している生徒会長の下に辿りついた。

「やあ、生徒会長さん。俺に、何か用があるんですか？」

ずいっ、と。生徒会長は彼女の吐息が耳にぶつかるぐらいまでに顔を近づけてきた。そこで女子からの黄色い声と、男子からの野太い罵声が響いた。

その中で、生徒会長は識織だけに聞こえる声量で、こう、言った。

「……あなた、死ぬ？」

ぞくり、と識織の背筋になにかが奔り抜けた。勿論、被虐的趣味から来る性的快感などではなく、死に対する本能的恐怖が背筋を凍らせたのだ。

このままでは凍らされたまま、するどい膝蹴りで粉微塵に砕かれてしまう予感がした識織。勿論、精神的な意味でも、肉体的な意味

でも、だ。

識織は、少し凍りついたような声で、空気を多めに排出しながら、声を出した。

「イエ、生キトウゴザイマス」

「うん、よろしい」

第七話：高校生の日常および非日常（後書き）

生徒会って、絶対に五人なんかじゃやりくりできない。僕は、この一年でそれを実感させていただきました。
え？　それを言うことに何の意味があるのかって？
意味なんて、あってもなくても、同じこｒｙ

ご感想ご批判ご指摘など、お待ちしております。

第八話：議題その一

「うん。一度だけ殺すけど、我慢してもらえるかしら本多識織くん」

「生徒会長殿。人間は一度死んでしまうと、生き返ることはできないのです。人は、一回しかない人生を大切に生きるべきだと、ワタクシは考えておりますですはい」

「生き変えるのだったら、出来るんじゃないかしら」

「変わっちゃったよ！　俺、生き変えったら、あの娘と結婚するんだ……ってしねえよ！」

「あら。死亡フラグを建てて、ご立派ね、識織くん。自ら死地へと赴く準備をするだなんて。いいわ、その意気やよし。存分に生き変えらせてあげるわ。存分にそのフラグを回収なさい」

「だから死にたくないって言っているじゃないですか生徒会長殿！　それに自分でフラグは折りました！　っていうか、源先輩って、死亡フラグとか知ってる人間だったんですね意外！」

「私を舐めないで欲しいものね、識織くん。それぐらい、前世から知ってるわ。私を誰だと思ってるのよ。あなたでは絶対に計り知れない存在よ」

「なんて高貴な存在……ッ！　喋るのすらおこがましいし、目の前にいるのすらおこがましい。いや、実に。なので、俺は帰らせていただきます」

「いただかなくていいわよ、識織くん。こんな冗長な語らいなんて、本当、プロローグですらないのだから。今から本編よ、識織くん。物語の核心へと踏み込もうと思うわ」

……とまあ、本当に無駄な語らいを、五分ほど続けた後、生徒会長源終夢と、一高校二年生本多識織は、会議テーブルを挟んで向かい合うようにして座った。

今は昼休み、明蘭学園の昼休みが他校と較べると長いのだが、それでもたかだか一時間程度。最初の方に三十分ほど食事をしたので、残りは三十分ほど。さっさと終わらせてほしいものだった。

「で、きみ、私と別れてバイトに行ったその帰り道、チープマーケットに向かう途中に、また自殺事件に関わり合ったらしいわね。そのトラブル体質。どうか私にも分けてほしいわ。人生が楽しくなりそう」

「あれ？　なんで俺の金曜日の生活がここまで赤裸々に露呈しちゃってるんだ？　やだ、……恥ずかしい」

いくらなんでも、生徒会長の権限を超えた何かが見え隠れしているとしか思えない。それとも、この面白いことが好きな源終夢という女性は、識織のトラブル体質に肖ろうとして金曜日の彼の動向をストーキングしたとでも言うのか。

それはそれで、別種の怖さを感じた。

「恥ずかしがって赤面しないで、気色が悪くて吐き気を催すレベル

だから」

「俺の顔面はそこまで酷くないと思う！　良く見たら中の上ぐらいには見えると思うんですけど！？」

「あ、大丈夫よ。私、男が赤面したのを見たら、大体言ってる台詞だから。今迄に言った人数も明確に憶えているわ」

何人が犠牲になったのか、識織としては少しだけ気になった。自分と同じ気持ちを味わった人間が、どれくらいいるのか。

「一人よ」

「俺だけじゃねえか！！」

「良かったわね、私のハジメテの人になれて。私のハジメテを貰える人間なんて、あなたをおいて他にいないわ」

「エロく言ったら男が喜ぶとか思わないでください！　嬉しくないですから！」

「だって、男が赤面したのを見るの、あなたが初めてなんですもの」

「……、」

それを言われると、男として気持が悪かった。

言われてみれば、男が赤面したのを見るなんて、気色が悪い以外他ない。男の赤面が許されるのは、幼い少年と、イケメン（女顔）だけだ。

「あなたと話していると、どうしても冗長になってしまうわね。煩わしい」

「指摘させていただきますと、語尾につくワタクシめを侮蔑する単語でございましょうか」

「そうね、改善させていただくわ、識織くん」

おほん、と。話を仕切り直すように、場の空気を零にするように、咳払いをする終夢。それを皮きりに、この場の雰囲気が引き締まった。どうやら、お惚けフェイズはしばらく身を潜めるようだった。

「識織くん、そこで、金髪の少女を助けたそうね。自分の愛車を犠牲にしてまで。迫るバケモノから、間違いなく不審者と思われるナイフを取り出してまで」

「……」

そういう武勇伝的なものは、脚色されたくはないと思っていた識織だったが、ここまで本当のことをずけずけ言われると、心が傷つく。武勇伝的なものは、脚色されてこそ武勇伝的なものなんだと、改めて認識させられた。

……まあ、今の話で、大体の全容は掴めてきたわけだが。

「入ってきていいわよ、風莉」

「……はい、終夢様」

識織が何に驚いたかというと、彼が入ってきた別口のドアから入って来た、先日助けた金髪の少女ではなく、高校生同士で様付けの

関係をリアルに見れたということだった。絶滅する以前から、存在していないと思っていた識織だったが、これに対しても認識を改めなければならないようだった。
その別口から入って来た金髪の少女は、此処、明蘭学園の制服を着ていた。そして、名札も校章も着けている。どうやら、生徒会長が不可思議な権力を使って入手した制服を着ている――というわけではないようだった。

「先日は助けていただき、ありがとうございます。本多識織先輩」

「えっと……どういたしまして？」

終夢が言った、『風莉』という言葉と、名札の『白船』という単語を合わせて、白船風莉（しらふねふうり）というのだろうか。
それにしても、この学校に染髪をした生徒がいるとは意外だったというべきか。この天下の進学校に。しかし、この学校にいるということは、ようするに、頭脳明晰または身体能力抜群のどちらかが備えられているというわけだ。

……お世辞にも、そうは見えない体つき。および顔つきだった。
いや、ここは人は見た目で判断するべからずという先人からの知恵を遵守すべきなのか。それとも、客観的感想をそのまま適用すべきなのか、悩むところだった。

「なんで疑問形なのよ、識織くん。女の子を助けたんなら、もっと堂々としていなさいな」

「どやぁ」

「どや顔はしなくていいわ。返ってだらしなく見えるだけだから。

まあ、返らなくてもだらしないんだけど」

「どこが！？」

「人の前で、簡単に『異能』を使っちゃうところとか、ナイフを使っちゃうところとか、かしら。能力者としては致命的ね、識織くん。自ら一般人と思しき人間の前で不可思議な現象を起こし、更にナイフまで持ち出すなんて」

「……」

言われるたびに、識織には言い逃れができなくなっていった。

能力者が日常生活を送るにあたって注意すべき点はいくつかあるが、その中での代表例として一番に挙げられるのは、無闇に能力を人前で使わない、だろうか。

識織はその上、ナイフまで持ち出してしまった。もはや、彼女からは識織のことが一般人には見えないだろう。銃刀法違反な上に、ミュータントである可能性すら見せつけられているのだ。

「まあ、そのことに関しては気にしないでいいわよ、識織くん」

「へ？」

「その娘（こ）、能力者だから」

「……へえ」

「……っ」

識織は小さく体を震わせた金髪の少女――風莉を興味深げに眺め

た。
この学校は、どうやら『異能』を持った人間が多いらしい。
自分、本多識織に始まり、目の前の生徒会長・源終夢、『創造(クリエイト)』、そして風莉。
ここまでくると、偶然で済ませては、偶然の定義があやふやになってしまう。
終夢は、くすくすと笑うと言葉をつなげた。
「能力者といっても、ほんの微弱なものよ。あなたの『真理の明眼』や、私の『波動』とか、あなたが入学当時命懸けで戦わざるを得なかった『創造(クリエイト)』なんかを相手にしたら、数瞬ともたないわ」
識織の能力だって、本来、戦闘向きではない。識織の戦闘力は、識織の戦闘力だ。能力による付加価値は利用するが、基本的に戦闘には向いていないのだ。
というより、能力が戦闘向き、戦闘専用のような能力など、あまりないのではないか。識織が入学当初戦った『創造(クリエイト)』だって、本来の使用用途は字面そのまま、創造する能力だ。その中で応用してこそ、戦闘能力を発揮する。
「あ、あの、あたしは、そのっ……」
「私の従順なる下僕よ、識織くん」
「……はい？」
素っ頓狂な声をあげたのは、もちろん本多識織少年だ。
高校生同士で、下僕やなんやら言われても、まったくもって要領を得ないだけなのだ。

「……あのぉ、今、なんと？」

「この娘は、私の従順なる下僕よ、識織くん。だから、先日のことは私からも礼を言わせてもらうわ。ありがとう、識織くん」

この女は、高校生にして既に下僕を所有しているというのか。

人類史上何度目かになる快挙ではないだろうか、と識織は汗を垂らす。なんだか、こういうことだったら先人の偉人達がやっていそうな気もしたので、少しだけ気弱だった。

「まあ、このお礼云々のことは、後日ゆっくりねっとりさせてもらうとするわ」

「なにをするつもりなのか男子高校生としては激しく気になるというかなんというか」

なんでもなかった。

おほん、と。終夢は本題の本題に入るために咳払いを一つ。しかし、もう空気はあまり締まらない。ふざけ過ぎたという、代償だ。

「まあ、今からの議題は、少しフザケタ感じにぶっとんでいるから、あまり畏まらなくてもいいわね」

「その議題とは、ずばりなんですか？」

「私が、レズだということよ」

「……」

ツッコまない。絶対にだ。

そう、心に堅く誓った識織。

「ああ、間違ったわ。魔術師と超能力者の目的についてだったわ」

……これは、ツッコむべきなのか、悩みどころが多い、ボケかどうかも分からない、なにかだった。

第八話：議題その一（後書き）

ご感想ご批判ご指摘など、お待ちしております。

第九話：議題その二

時計の針は既に午後一時三十五分を指しており、いよいよ昼休みも十五分となっていた。識織の当初の望みとなっていた、早く話を終わらせてほしい、というのは、今から本題が始まるとなると、無理な相談らしい。

「これはね、識織くん。本当にぶっ飛んだお話なんだけどね？　話半分ぐらいに聞いていたらちょうどいいぐらいの、お話だから。だけど、だけど識織くん。これは、私達にとって、とても切実で、とても身近なお話だから、識織くん。フザケズには、聞いてほしいわね」

との、生徒会長からの長ったらしい前置きを拝聴させていただいた後、識織は言葉通り話半分に受け取るつもりになった。

「魔術師と超能力者の違いって、なんだと思う？」

「その前に、なんで魔術師のことを先輩が知っているのか……っていうツッコミはやめておきますですはい」

話の邪魔をするな、とう言葉がそのまま入念に混ぜられた聖顔で見つめられたので、今回は引き下がることにしたらしい。

それを見て終夢は、「よろしい」と満足げに頷く。

「さあ、なんだと思う？」

「……チカラの、使い方とかですか？」

「それも正解かしら。使っている生命力（モノ）は一緒だし、まあ、ハズレじゃないわ。だけどね、識織くん。そんなことは、小さな区別よ」

終夢が横に控えていた風莉に視線だけを向けると、「風莉、あなたはどう考える？」と淡々と尋ねた。

彼女はその問いに、少しだけ天井を仰ぎ見てから、答えた。

「……チカラに対する渇望の有無、でしょうか」

「正解よ、よくできたわね。あとでご褒美を上げるわ」

その言葉を聞くと、風莉はこの日一番の笑顔で瞳を輝かせながら、

「はいっ！　ありがとうございます！」と答えるのだった。

どうやら、今さっき不覚にも入手してしまった、生徒会長はレズ、という情報には信憑性があり、なおかつそのお相手は一年生の女子生徒だということが分かった識織。人は見た目によらないというか、見た目通りというか、そんな感想だ。

「今ので理解できたかしら、識織くん。魔術師と超能力者の違い」

「ん？　えっと……自分から能力を望んだか望んでいないかの違い、ですか？」

「そうね。幼稚に言うと、そんな感じだわ」

この女子生徒は、どうやら人をいたぶるのが好きらしい。これもこの後クラスメイトAに教えてあげるべき情報なのだろう。

終夢は、そんなフザケタ（本当に話半分で聞いてもらっていると

は思っていない）想像をしている識織には気付かず、真剣な面持ちのまま話を続けた。

「自ら異形になった者と、事故的に異形になった者。私たちみたいな身持ちの軽い人間にはわからない話だろうけど、その両者には目的があるとされているわ」

終夢は魅惑的な微笑を浮かべると、一本、右手の人差し指を形の整った鼻の前に立てると、まるで試すかのように識織に問うた。

「識織くん。あなた、神様って信じるかしら？」

「……は？」

「か・み・さ・ま。ゴッド。ディオ。いろいろな呼称があるけど、ここは神でいいわ」

神。世界各地の伝承に登場し、憧れ、尊敬、進行の対象となる存在で、人知を超えた絶対的存在、超々規模の自然現象を擬人化した存在、人外とも呼べる功績を残した人物など、様々な概念に用いられる単語。

世界各地でその信仰状況は違い、唯一性を強調する場合は一神教、多元性を強調する場合は多神教、偏在性を強調する場合汎神論が生まれる。神話的伝承の中で、神は超越的で絶対的な存在であるとともに、人間のような意思を持つとされる。しかし、近代では様々な観点（近代科学の発展、無神論者からの批判）から、そのような神理解は改めるべきだとの意見も現れわれている。

「神様って、ゼウスだとか、オーディンだとか、天照大神（あまてらすおおみかみ）だとかですか？　ああ、あとヤハウェとかも有名ですっけ？　けど、唯一絶

対の神だから、『その名をみだりに口にしてはならない』とかで、二十一世紀の初頭にローマ教皇がなんかお触れを出したとか」

意外と博識な識織。そのことを意外に思ったのか、終夢はおろか風莉ですら、彼女の横で驚きの表情を見せていた。

「へえ。意外と博識なのね、識織くんは。そこまでオカルトに興味があるのかしら。テストでは、学園始まって以来の問題児だとされているのに」

「馬鹿だと言いたいならそう言え！」

「馬鹿」

「言われると傷つくけどすっきり言われた方がなんかいいのは何でだろう……」

「それが俗に言う気分の問題という奴よ。そんなことに疑問を抱くなんて、識織くん、かなりねちっこい性格してるのね」

「……で？　神様がどうかしたんですか？　新興宗教のご案内なら、いりませんよ」

どうやらこれ以上の掛け合いは冗長になるだけと感じたのか（今までも充分冗長過ぎるのだが）、話を強制的に戻した。

「ふふ。どうやら、識織くんは無神論者のようね？　なにか神様に嫌なことでもされたのかしら？」

「まずはこのトラブルを引きよせる体質をどうにかしてほしいです

ね。こんな体質、神様は俺に死ねと言っているようにしか聞こえませんから」

「でも」

終夢は全てを見透かしたかのような表情で、識織に言う。

「その体質のお陰で、得られたものもあるのでしょう？」

その通りだった。この体質のお陰、というのは何だか癪に障るので、所為で、自分はそれなりの成長は出来ていると思う。愛知で親におんぶに抱っこの状態に較べると、大分。昔の知人からしてみれば、擦れ違ってもほとんど気付かないぐらい。

その点は、まあ、妥協してもいい所だとは思う。

「何もしないで、何も起こらないで得たものなんて、そんなもの要らないわよ。ゆっくりでもいいから、自分で近づいていって、ときには巻き込まれながら得たものじゃないと、私は満足できない」

「……そう、ですね」

それは、先日識織もしていた考察だ。

過程も何もすっ飛ばして得たものなんて、正直何の意味も、価値もない。

だが、それはとても御大層なものだが、それを選ぶことが簡単ではないのもまた、事実だ。

「……あら？」

そのとき、生徒会長源終夢は、全校生徒の前では絶対に出さない

ような間抜けな声を、確かに発した。
　その視線は、生徒会室に取り付けられている、クラシックな振り子時計に向けられていた。それにしても、流石生徒会室。素人勘定でも、あの時計が価値のあるものだと感じる。
　現在時刻、午後一時四十五分。

「……あーあ。どうしてくれるのよ、識織くん。本題に微妙に入って終わっちゃったじゃない。これは私を焦らしているとでもいうの？　だとしたら、相当な策士ね」

「先輩がボケなかったらすぐ終わりそうだったんですけどね！」

「え？　……ボケ？　あらやだ識織くん。私、ボケなんか言ってないわよ？」

「え？」

「あなたを傷つけるための、毒舌暴言罵言だもの。別にツッコミを入れてもらう必要は」

「ある！　俺の尊厳の為にも十分にある！」

「あなたに尊厳があったとは、驚きだわ。まさか、今日はアルマゲドンでも起るのかしら」

「俺の尊厳の存在は、地球規模の災害を引き起こすとでも言うのですか！？」

「うん」

「あっさり肯定しやがった……」

そんなやりとり（主に識織苛め）をしている内に、時間はさらに三分経過していた。昼休み後の清掃場所にいく時間も含めれば、一分一秒も惜しい所だ。そんなところは意外と真面目な、識織少年だった。

「じゃあ、識織くん。今日の放課後、また来て頂戴ね」

「え、それは。俺、バイトあるんで」

それを聞いて、終夢は右手の人差指中指を立てた。

「時給二万円でどうでしょう？」

識織は決して低くは無い生徒会室の天井を見上げ、何か思い至ったように頷くと、ポケットに手を突っ込み、愛用のスマートフォンを取り出し、電話帳からある番号にかけた。

「ああ、店長さん。すみません、俺、今日熱出ちゃって……ああ、はい、大丈夫です。明日には、なんとか――」

金の欲望には逆らえない、平々凡々な高校二年生、本多識織（♂）であった。

第九話：議題その二（後書き）

説明のターンがしばらく続くのかな？
とにかく、自分の中の世界観を、書きださなければ。

ご感想ご批判ご指摘など、お待ちしております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0981z/

真理と俺。

2011年12月5日21時56分発行